京都都心部の校区コミュニティにおける廃校の文化資源的価値と 地域再生に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: HAGIHARA, Masaya メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4109

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

京都都心部の校区コミュニティにおける廃校の文化資源的価値と地域再生に関する研究

学芸学部　ライフプランニング学科　萩原　雅也

研究の背景と目的

京都市は政令指定市の中でも早くから都心部の人口減少と少子化が進み、68 校あった小中学校が 17 校に統廃合されている。明治以来、京都市の小学校は、地域住民や自治連合会によって支えられ、校区ともに歩んできた歴史を持っている。廃校跡地の活用方法についても、行政と校区コミュニティの密度の濃い話し合いによって進められ、他の政令指定都市と際だって異なるものとして評価されてきた。

本研究は、このような特色を持つ、京都の廃校となった小学校を対象として、住民や来訪者の意識調査を行い、廃校小学校が有する地域文化資源としての潜在的価値とその活用による地域再生の可能性を探ろうとしたものである。

研究の焦点と内容

本研究では、中京区の元・立誠小学校を事例として取り上げた。1992 年に閉校となった同校は、広域的まちづくりのための跡地活用が模索されたが未活用のままとなっている。同校は京都有数の繁華街である木屋町の中心部に位置しており、校区の立誠自治連合会は、学校周辺の環境が閉校によって悪化することに危惧の念を高め、教育施設として維持し、地域の環境を守るという強い意志をもって活動してきた。また、同校は日本で最初に映画が上映された所に立地し、京都一の映画興行街として繁栄した新京極通も校区に含まれる。同連合会は、このような文化資源、アイデンティティを大切にし、近代建築としての価値も持つ元・立誠小学校を芸術・文化発信の拠点として再生し、発展させるという構想を抱き、教室を転用した映画館（立誠シネマプロジェクト）やカフェの開設などの新たな活動、事業にも取り組んでいる。

具体的には校区関係者へのインタビュー調査と住民・来訪者へのアンケート調査に取り組んだ。この内、アンケート調査は、立誠自治連合会・立誠シネマプロジェクトの協力のもとに、2015 年 12 月から翌年 3 月までに自記式アンケート用紙によって実施した。①自治連合会会員（地区事業者を含む）対象、②元・立誠小学校でのイベント・事業への来場者対象、③立誠シネマプロジェクト来場者対象の 3 つである。アンケート用紙の配布・回収方法は、①は各自治会を通した各戸への配付と元・立誠小学校設置回収箱での回収、②はカフェでの配布と回収箱による回収、③はシネマ受付でのアンケート用紙配布と回収箱による回収による。

研究成果の概要

アンケート調査の回収実数は、①：29、②：46、③：188 である。校区住民に対するアンケートでは十分なサンプル数が得られなかった。来訪者に対する調査では、校舎に対する認識として、「母校ではないが懐かしさを感じる」が 80％を閉め、元・立誠小学校校舎が持つ文化的雰囲気が来訪者にとっても認識されていることが分かった。また、現在検討が進められている跡地活用において重視すべき項目に関する質問では、次のような結果が得られた（図 1・棒グラフ内の数値は回答者数）。さらに、跡地利用に関するアンケート自由記述の分析も加え、来訪者が元・立誠小学校に対して、地域の歴史や伝統を大切にしつつ校舎を保存し、芸術・文化活動の拠点として再活用されることを望んでいることが明らかとなった。

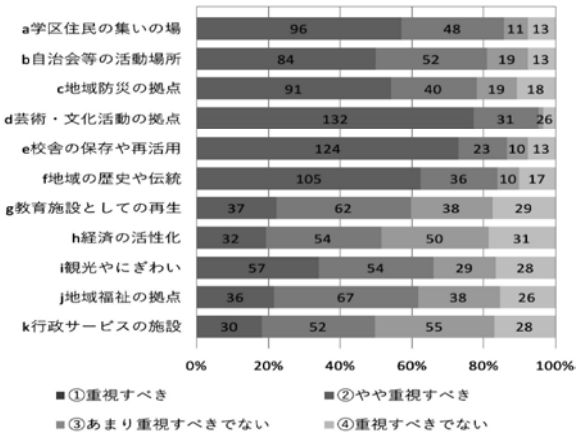

図 1　跡地活用について重視すべき項目